「心も思いも一つにし」
使徒言行録 4 章 32－37 節

初代教会の人々は、持ち物を共有し、財産や持ち物を売ってはそれぞれの必要に応じて分配する（32 節）という生活をしていました。その前提にあったものは「心も思いも一つ」にするということでした。では、彼らはどういう心と思いを共有したのでしょうか。それは、キリストの復活の恵みに共にあずかるという信仰です。

イエスさまが、私たちの全ての罪を背負って十字架にかかって死んでくださった。それによって私たちに赦しの恵みを与えてくださった。その恵みに共にあずかる信仰を共有したのです。それはさらに言えば、お互いが罪人であり、神さまに赦していただかなければ生きられない者だということにおいて、心と思いが一つになったということです。そして罪人であるお互いが、キリストの十字架と復活によって、赦しと新しい命を与えられているという恵みを共有したのです。そこから、持ち物の共有という生活が生まれたのです。

彼らの中には「一人も貧しい人がいなかった」と言います。しかし、このことは、信者となった者は一切の私有財産を売り払って教会に献金しなければならないとか、信者は教会による分配によって生活していくこと、というような決まりや制度が初代教会にあったということではありません。ここにあるのは、自分さえ満たされていれば他人のことなど関係ないというような無関心な生活ではなく、「心と思いを一つにして」、まさしくキリストにある一つの神の家族として、互いに隣人たちに心を向け合い、持っているものを分かち合っている姿です。神さまに愛され、赦された者として共に生きることを喜ぶ生活を営んでいたことが証しされているのです。

初代教会のこうした愛の交わりは宣教の大きな力になって行きました。信じた人々の群れが、心を一つにして、だれもが人のために、自分にあるものを喜んで用いる用意があった。そうした愛の交わりがあったとき、使徒たちは、「大いなる力を持って」力強くキリストを証しすることができました。

聖書には、そのように生きた一人として、「慰めの子」バルナバと呼ばれていたヨセフという人のことが記されています。バルナバは、後にエルサレム教会から派遣されて、最初の異邦人教会であるアンティオキア教会の設立メンバーとなりました。また、使徒パウロをエルサレム教会に紹介し、彼を表舞台に立たせた人物でもあります。さらには、パウロと共に宣教旅行に行くことにもなるのです。

そんなバルナバですが、彼も当初はエルサレム教会に属する一人の信徒に過ぎませんでした。そして熱心に献金をし、忠実に主の教会に仕える人でした。畑を持っていたことから、それなりの財産を持っていた人であり、それを売った代金をきっぱりと捧げるという献身の心を持っていた人でもありました。そういう彼の姿は、やがて自分の生涯を主のためにささげる献身の生涯へと繋がっていきました。

なぜバルナバは、そのようなことが出来たのでしょうか。それは彼がイエス・キリストの愛に生かされていたからです。ただ滅びるしかなかった自分が神さまによって

愛され、生かされている。その恵みにバルナバは応えたのです。彼のそうした愛の業は、だれからも、何からも強制されるものではありませんでした。ただキリストの愛によって突き動かされた信仰から生まれたものだったのです。初代教会の人々は、ただ持ち物を共有していたのではありません。それは彼らが心と思いを一つにしたところから生まれた感謝の心からにじみ出た業であったのです。

　かつて、エジプトの地から導き出されたイスラエルの民は、神さまのための幕屋を建設するという一大事業を行いました。そのことは出エジプト記の 35 章以下に記されています。その時、民は誰に強制されるのでもなく、進んで心からそれを行いました。それぞれが自発的に、持っているものを捧げたのです。なぜなら、心動かされたからです。イスラエルの民は、奴隷とされていたエジプトから導き出され、絶体絶命とも思われた葦の海でも神さまの不思議な御業によって守られました。そして、シナイ山のふもとで「主なる神さまこそ私たちの神である」と信仰を告白しました。しかし、彼らは、神さまの恵みを忘れ、金の子牛という偶像を作ってしまいました。けれども、それにもかかわらず神さまは、イスラエルの民をひたすらに愛し、赦しの恵みを与えてくださったのです。その恵みの主の招きに、彼らは応えたいと思ったのです。

　私たちも、私たちのためにイエス・キリストがなしてくださった大きな御業を信仰の原点として、心に留めたいと思います。イエス・キリストは私たちのために、喜んでご自分を差し出してくださった。その神さまのために、イエス・キリストのために、私たちも喜んで従っていく者でありたいと願います。